

音

のまにまに

MUSIC LIFE

FIVE

映画評論家、演出家、作家、ミュージシャン、そしてバッグデザイナー……様々な顔を持つ木村奈保子さん。今回のエッセイは8月に行なわれた「ティム・バートン&ダニー・エルフマン映画音楽コンサート」がテーマ。このコンサート、木村さんだけの希望で取材が実現しました！



©清水隆行

“世界観” “思い” が伝わる新しい形のコンサート

これからの映画音楽コンサートとは何か、を考えていたところ、「ティム・バートン&ダニー・エルフマン映画音楽コンサート」がこの夏、東京でも上演となり、東京フィルハーモニー交響楽団により演奏された。もちろん、ホラー映画ファンとしては、ティム・バートン映画もかなり好きなワールドのひとつ。

さて舞台となる東京国際フォーラムのホール(A)は、たまに大作メジャー映画でゲストが来日したときくらいしか普段の試写会には使われない。この日はクラシック演奏会ながら、中央に堂々、スクリーンプロジェクターが設置され、始まる前から予告などの映像が流れる。映画ファンにとっては、居心地の良い状態だ。楽曲アレンジは、作り手の集大成だから、気のすむまで練られているはず。映像は、監督本人の作品だから許可を気にせず、やり放題。面白いに決まっている。これから始まる映像と生演奏のマッチングに、環境作りは完璧なのだ。

なによりテーマは、作曲家ダニー・エルフマン作品とティム・バートン監督作に絞られ、徹底してひとつの世界を追求する。良かったのはパッケージのミュージカルショーではなく、あくまで“クラシックの演奏会”として管弦楽団で行なわれたことだ。

ジョン・マウチュエリ指揮による演奏タイトルは、映画「チャーリーとチョコレート工場」には始まり、「アリス・イン・ワンダーランド」まで、全15曲。

プロジェクターには、映画のダイジェスト編集や、ティム・バートンによる原画もはさまこまれ、この静止画と動画の編集映像に合わせて、演奏の時間がびったり計算されたように、ときには歌詞にまで合わせて、ドッキング。スピード感たっぷりに、音つなぎで次の曲へと展開する。テンポ、リズムに合わせる指揮者は、映像も見ながら棒をふっている。

それでも、オケのリハーサルはたった1回しかなかった、とあとでフルート奏者のさかはし矢波氏から聞いた。アマチュアオケでは難しそうだ。ただ日本人の合唱団もオケの半分くらいはいて、ゲストにはロックなソロバイオリニストも。

さすが、監督と彼の映画音楽の相棒、作曲家が二人で演出構成をしただけあって、世界観は実に表現されつくしている。

それでも、なにより圧倒されたのは、2幕目後半からさりげにトークゲストで登場したエルフマン本人の芸の力。エルフマンは、原画の声を吹き替えたり、語ったりしながら、さりげなく歌いはじめ、いつのまにかホールを熱気と歓喜で埋め尽くした。この洗練された自己演出で、たちまち「ナイトメア・ピフォア・クリスマス」の世界へと聴衆を一気に導いて、ハリウッドパワー全開となったのだ。

エルフマンをよく知らなかった人々も、バートン映画をそれほど多く見ていなかった人も、なんとなくコンサートを楽しむつもりだった人も、またたくまに、エルフマンの世界に引きずり込まれ、スタンディング。元ロックバンドのスターによる芸達者なミュージシャンのなせる技だ。とおもいきや、もうひとつのおみやげが……。エルフマンのノリに合わせて、淡々



とした顔つきの指揮者マウチュエリ氏も突然、トークから歌へと軽くコール・アンド・レスポンス。つまり、エルフマンとの語りとの掛け合いに参加したのだ。なんとまあ、カッコいい。こういうアメリカンのエンタメ芸をさりげなく見せるタイミングが絶妙で、嬉しすぎて涙さえ出た。これぞ、いまどきの映画音楽コンサート！

そもそも、エルフマンは、オインゴボインゴというロックバンドで歌手デビュー。兄が監督するカルトなミュージカル映画「フォービドンゾーン」で作曲家デビューを果たしたが、そのとき彼は、敬愛するアフリカ系アメリカ人、キャブ・キャロウェイの「ミニニー・ザ・ミュージチャー」をパロディにしたシーンを作った。キャロウェイは、1930年代から活躍したジャズ歌手で、ビッグバンドのリーダー。日本でもおなじみになったアニメ「ベティ・ブーブ」が映画デビュー作で、キャロウェイ・バンドの映像がオープニングテーマ曲に使われた。楽団の前のスペースで妙な踊りを踊りまくり、歌うかと思ったら指揮もする。

エルフマンは、バートン映画以外でも依頼が殺到する映画音楽作曲家になっているが、それでもバートン映画「ナイトメア〜」では声優としても登場し、「チャーリーとチョコレート工場」のウンパルンバが歌うシーンを自らひとりで行っているお茶目なキャラ。成功しても、バンド魂は決して失わない遊びどころがいっぱいだ。今回、指揮者とのからみの演出は、キャロウェイをやりたいかっただとわかった。クラシックオケとスイングしたいエルフマンの思いが伝わるコンサートだったことは間違いない。

ティム・バートン描く独自の映像世界は、もともとエルフマンが持つ個性と共通するところがあり、自由なアニメワールドにシュールな恐怖感、無垢な気持ち、幻想的な夢、おどろおどろしい興味、醜さ

と残酷さ、清いハートなど、複雑な子ども心が表され、音楽的で刺激が強い。決して、バートンワールドとビジネスライクな関係ではなく、仲間なのだ。

だから、共通するワールドからスタートし、お互いの映像と音が、重なり合い、ぶつかり合い、より刺激のあるストーリーを展開させる。これほど、うまくからめる監督と作曲家の関係はハッピーだ。

いずれにせよ、映画のひとつの“世界観”を伝えるところから、映画音楽コンサートは始まり、シネマコンサートのあり方、理想形のひとつを見せた。映画ファン用に作曲家や監督がただ出演すればよいのではなく、ただ映像を流せばよいのではなく、その“思い”が伝わり、ショー的な要素を加えること。企画構成に思いのある映画人が、演出をすること。出来あいのアレンジ譜と曲目リストを連ねるだけの映画音楽コンサートでは、だめなのだ。ハリウッド映画人による規模で実現するのは、日本ではなかなか難しいかもしれない。しかし、私もこれまでシネマコンサートの解説出演を依頼されてきたが、やはり構成、演出を兼ねたときのほうが面白い。

知っている映画をリストアップし、共感を呼びこみ、客に媚びるのではなく、知らない映画でも惹きこめるような世界観の演出で、生演奏も映画も引き立つようなコンサートが出来たら、意義があるだろう。

たぶん、私の予測では、今回のコンサートを体験した人はティム・バートンの映画を再度見たり、まだ見ていない作品や新たな新作に注目したり、はたまた醍醐味のある交響楽団のコンサートにも足を運びたいと思っただろう。

常に未知の文化にふれたいと思っている日々、日本における映画音楽コンサートは、新しい形が模索されている。

MUSIC LIFE



Information

NAHOK(ナホック)新作のご紹介

NAHOK(ナホック)の機能素材は、完全防水のドイツ製強靱生地にて温度調整機能素材などを挿入。仕様は、演奏者との研究のもと練りに練られ、デザインクオリティーは欧州ブランドバッグの優美さと洗練さを併せ持つ、まさに妥協を許さないアートバッグです。

さてNAHOK新製品は、フルートC管、H管ハードケースを備え付けのカバーマットでくるみ、鞆の底に固定することができる、横置き可能なマチ厚ブリーフ!!

これまでブリーフには使用できなかったNAHOK、GMシリーズも、鞆の底にすっぽり入れられます。



ワイド・ブリーフ「Banderas」

定価 59,400円

(外寸) 28cm×44.5cm×マチ幅9.5(トップ) ~ 11.5cm(ボトム)

(内寸) 27cm×43.5cm×マチ幅8.5(トップ) ~ 10.5cm(ボトム)

(カラー) マットチャコールグレー、ホワイト/ピンク スペシャルコーティング

※ マットチャコールグレー
NAHOK自慢の最高級厚手スーパーフェルトのつやなしで、ぶつぷつした型押しボティの素材。ハンドルもグレーの本革をあしらいました。レッドネームのステッチがけも上品にマッチした大人のチャコールグレー。男女ともに兼用できそうなマニッシュクールなデザインです。

※ ホワイト スペシャルコーティング
PVDF=ポリフッ化ビニリデン加工を施した光沢の美しいスーパーフェルト。耐熱性、耐候性、耐摩耗性、耐衝撃性がより強く、電子材料や釣糸、ウクレレ、ギター、バイオリンの弦などにも使用されるほどの強靱な樹脂素材。防水、UV加工のほか防汚加工も強力です。



木村奈保子

映画評論家、作家、演出家、NAHOKデザイナー。京都外大卒業。CBC局アナから映画評論家へ転身。ゴールデンタイムの映画解説を17年間勤め、同時に演出家としてテレビ番組やファッションビデオの制作や、著作、講演なども多数手がける。昨今は、映画音楽の演奏活動やプロデュース、ダンス舞台の演出ほか、画期的な楽器ケースを研究開発、デザイン。文化的かつ、アントレプレナー(企業家)の資質で活躍する。
www.kimuranahoko.com/